医療法人三幸会ケアサポートセンターけいほく

［認知症対応型共同生活介護用］

1. 評価結果概要表

作成日　2008年8月25日

【評価実施概要】

事業所番号	2670700471
法人名	医療法人　三幸会
事業所名	ケアサポートセンターけいほく
所在地	〒601-0321　京都市右京区京北塔町中筋浦44番地の1 （電　話）0771-53-8181

評価機関名	社団法人京都ボランティア協会		
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル海湊町83-1　ひと・まち交流館　京都1階		
訪問調査日	平成20年9月17日	評価確定日	平成21年1月29日

【情報提供票より】（平成20年8月17日事業所記入）

（1）組織概要

開設年月日	平成　16　年　4　月　1　日	
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計　9　人
職員数	13　人	常勤　6　人，非常勤　7　人，常勤換算　人

（2）建物概要

建物構造	木造
	1 階建ての　1 階　～　階部分

（3）利用料金等（介護保険自己負担分を除く）

家賃（平均月額）	45,000　円		その他の経費（月額）	円
敷　金	有（　円）		○無	
保証金の有無 （入居一時金含む）	○有（　30万円　） 無		有りの場合 償却の有無	無
食材料費	朝食	260　円	昼食	610　円
	夕食	610　円	おやつ	200　円
	または1日当たり　1680　円			

（4）利用者の概要（　8　月　17　日現在）

利用者人数		9 名	男性　1 名	女性	8 名
要介護1		0　名	要介護2	1	名
要介護3		4　名	要介護4	3	名
要介護5		1　名	要支援2	0	名
年齢	平均	86 歳	最低　78　歳	最高	96 歳

（5）協力医療機関

協力医療機関名	京都市立京北病院、安井歯科医院

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

精神科病院を母体とした医療法人が京都市北部の山間地である京北町に開設したセンターであり、デイサービス、クリニックが併設されている。北山杉をふんだんに使った木の暖かみのある建物はのんびりとした、豊かな自然に溶け込んでいる。認知症とそのケアについて、地域住民に貢献したいと願っており、あんしんサポーター講座を開催し、好評であった。ただ開設満4年が経過しているが、地域住民に開放されているふれあいサロンの活用がまだまだなので、運営推進会議で知恵を求めている。いままでは内部の基礎固めをしてきたので、これから地域に目を向けて、種々の活動をしたい意向である。家族との関係は良好であり、毎日来る家族には職員も感謝している。若い男性管理者は就任したばかりであるが、その人柄により、職員も利用者もやわらかい雰囲気のなかで自由な暮らしが営まれている。職員は地元採用であり、安易な退職がなく、利用者に意欲ある生活をしてもらうための工夫をするなど、意欲的に働いている。

重点項目①	**前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況（関連項目：外部4）** 今までの評価の指摘を受けて、これまでは内部の基礎固めをしてきたが、今後は地域に目を向けて、地域との連携を図りたいと考えている。その他、改善できることは積極的に改善している。 **今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4）** 評価に関しては毎年の受審であり、職員もその意義を十分理解して取り組んでいる。自己評価は全職員が意見を出し合ってまとめている。
重点項目②	**運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6）** 利用者、家族、地域の民生児童委員、地域包括支援センター職員をメンバーとして、2カ月に1回開催し、記録を残している。記録は欠席者にも送付している。「行事の際に家族の交流をしては」とか、認知症理解の講演やこころのクリニックやふれあいサロンの活用を求める意見など、活発に議論されている。
重点項目③	**家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8）** 家族からの苦情は少ないが、職員は必ず記録に残し、真摯に対応している。またカウンターに『一言雑記』というノートを置き、面会に来た際などに家族が気軽に意見を書いている。またお互いに他の家族の書いたものを見ることもできるので、記録上の家族交流になっている。
重点項目④	**日常生活における地域との連携（関連項目：外部3）** 町内会の活動である溝掃除、草刈、防災フェア等に参加している。とくに山国祭りは大きな祭りであり、利用者は喜んで見物している。小・中学の福祉の体験学習を受け入れており、来訪した小・中学生が利用者と楽しく遊んでいる。近くの特養豊和園で開催された夏祭りに今年初めて参加して、利用者も楽しんでいた。

2. 評価結果（詳細）

（ ▒ 部分は重点項目です ）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営					
1．理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	法人の理念の3点を踏まえて、グループホームの理念を3点決めている。それは「①ゆっくり楽しくよりそって暮らせる家を目指します。②自分でやれる喜びと達成感のある暮らしを目指します。③ご利用者さま、ご家族さま、地域の人びと、私たちスタッフの幸せを目指します。」であり、これは管理者や職員が話し合って決めたものである。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	職員は上記の理念を業務のなかで実践することを心がけている。ホームの居間には書でしたためて額に入れて掲げている。グループホームの理念を策定したときにすでに入居されていた利用者や家族にはまだ説明ができていない。また広報誌にも掲載されていない。	○	理念について利用者、家族、地域の人たちに一層の理解を求める活動が、今後求められる。
2．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	町内会の活動である溝掃除、草刈、防災フェア等に参加している。とくに山国祭りは大きな祭りであり、利用者は喜んで見物している。小・中学の福祉の体験学習を受け入れており、来訪した小・中学生が利用者と楽しく遊んでいる。近くの特養豊和園で開催された夏祭りに今年初めて参加して、利用者も楽しんでいた。		
3．理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	評価に関しては毎年の受審であり、職員もその意義を十分理解して取り組んでいる。自己評価は全職員が意見を出し合ってまとめている。今までの評価の指摘を受けて、これまでは内部の基礎固めをしてきたが、今後は地域に目を向けて、地域との連携を図りたいと考えている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者、家族、地域の民生児童委員、地域包括支援センター職員をメンバーとして、2カ月に1回開催し、記録を残している。記録は欠席者にも送付している。「行事の際に家族の交流をしては」とか、認知症理解の講演やこころのクリニックやふれあいサロンの活用を求める意見など、活発に議論されている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	長寿すこやかセンターと区社協の協力により、認知症あんしんサポーター講座を開催し、家族や地域の人たちが30人ばかり集まり、充実した会となった。ただ行政担当者との連携は少ない。	○	京北町という山間の村での唯一のグループホームであり、ふれあいサロンという会場も備えているので、行政の協力体制を得て、さらに多くのことが実現する可能性があるので、今後の地域社会をにらんで、さまざまな取り組みが求められる。
４．理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	季節ごとに、それぞれの利用者の様子を書いたものと写真等を家族に送付している。面会は毎日来る人から、少ない人でも3カ月ごとに来るので、その際に情報交換している。写真がいっぱい入っており、認知症の知識なども掲載している『三幸会　ケアサポートセンターけいほく通信』という広報誌も季節ごとに発行している。年末大掃除のあとの忘年会と花見、敬老会の年3回の行事に家族を招待し、家族同士の交流が図られている。このときに職員異動を報告している		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族からの苦情は少ないが、職員は必ず記録に残し、真摯に対応している。またカウンターに『一言雑記』というノートを置き、面会に来た際などに家族が気軽に意見を書いている。またお互いに他の家族の書いたものを見ることもできるので、記録上の家族交流になっている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	多くの事業所を運営している法人として、管理職の法人内異動は避けられず、約1年は異動がないというくらいの方針がある。当グループホームの職員は地元採用であり、安易な退職を防ぐ要因となっている。管理者は職員の話をよく聞くように心がけており、懇親会の開催などもあり、その結果この1年間の退職者はない。		
５．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内研修計画があり、食、ターミナルケア、身体拘束、感染症および食中毒、リスクマネジメント、救急法、三大介護、認知症、老年期の疾病などのテーマが実施されている。外部研修は職員に情報を提供し、受講を促しており、費用や交通費等を負担している。資格取得の支援もあり、資格手当ても支給される。一人ひとりの職員の課題は管理者との話し合いにより、方向性を決めている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会に加入し、研修に参加している。また特養豊和園との交流はある。職員は地元採用でもあり、また京北町に他のグループホームはないことから、他のグループホームを見学することは実施されていない。	○	職員が他のグループホームを見学し、そこで職員同士の交流をすることは、大きな研修の効果があるので、少しずつでも実施することが求められる。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援 1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用者は地域の人が多く、利用前の見学に対応している。病院の退院と同時に利用する人もあるので、試し利用ができないこともある。利用開始の際には他の利用者との関係がスムーズにいくように配慮している。		
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者は長い人生を送ってきた人なので、職員は教わることが多い。子育てのことなど、職員はよく聞いている。一緒にテレビを見て、大笑いしたり、泣いたりもある。利用者がかつて丁稚奉公に行っていたときのことを聞いて、もらい泣きしている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント 1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	申込書と医療情報、介護情報を収集し、ADL等のフェイスシートが記録されている。東京センター方式でアセスメントをとっている。得意なこと、好きなこと、苦手なことなどとともに簡単な生活歴が収集されている。		
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	利用者が入居されると、アセスメントをとり、仮の介護計画を作成し、1～3カ月が経過した後に介護計画が作成される。介護計画の作成にあたっては利用者や家族の意向を聞いている。職員全員が介護計画に主体的にかかわるということにはまだなっていない。	○	アセスメントにおいて収集された生活歴等を介護計画に反映することと、職員の英知を集めて、利用者の生活において生きる意欲がもてるような介護計画にすることが望まれる。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	介護計画にそって、介護計画の実践表が記録されており、モニタリングは毎月点検されている。カンファレンス会議が開催され、介護計画の見直しの必要が検討されている。支援経過記録は「利用者の言動」、「職員が思ったこと」、「実施したこと」を書くように書式があるが、利用者の言動が中心となった記録である。	○	介護計画にそって実施されたかどうかの記録はあるが、実施した結果の観察と考察が書かれていないので、介護計画を実施した際に職員の観察と介護計画への考察を記録し、モニタリングの根拠とすることが望まれる。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
３．多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	併設のデイサービスでの交流、こころのクリニック（診療内科）での受診などが実施されている。馴染みの理美容院へは同行している。併設のふれあいサロンの活用が少ないので、運営推進会議で相談したり、『京北町だより』に掲載して、地域の人の活用を図り、ホームの利用者との交流をしたいと予定している。		
４．本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	併設のこころのクリニックには月2回精神科医がくるので、往診が可能である。かかりつけ医には家族が同行しているので、グループホームからサマリーを提供している。歯科医は近くにあり、通院には同行している。認知症専門医としては法人内の北山病院の医師と連携している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	現在のところ明文化された方針はない。利用者や家族に意向を聞いているところである。利用者や家族が希望すればターミナルケアに対応したいという思いはあるが、医師、看護師、家族の協力がないとできないと考えている。ターミナルケアについて不安をもっている職員も多い。	○	ターミナルをどのような形で迎えたいのか、利用者と家族の率直な希望を聞き、ホームとしての方針を決定することが求められる。その際、職員同士の十分な話し合いとともに、ターミナルケアに取り組む場合には職員研修が欠かせない。また医師と看護師の協力体制を整えることも急がれる。
１．その人らしい暮らしの支援 （1）一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	個人情報保護に関しては法人に規程があり、遵守されている。トイレ誘導の声かけが時に大きな声になること、居室のドアが開けっ放しであること、車椅子を押す場合に声かけができていないときがあること、運営推進会議に利用者の個人情報が提供されていることなどは、プライバシー保護の観点から改善が求められる。	○	運営推進会議において、利用者の個人情報を提供することに配慮が求められる。生活のなかで、居室やトイレのドアを開けっ放しであること、トイレ誘導の際の声かけには十分注意することが望まれる。
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	おおよその日課はあるが、一人ひとりの利用者のペースにあわせて、無理強いはしていない。起床時間も就寝時間も自由である。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（2）その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	献立はなるべく利用者の希望を聞くようにしている。食材の買い物は職員が利用者とともに週3回出かけており、調理には利用者も参加している。食器は利用者が使い慣れたものを持ち込んでいる。高齢者の食べ慣れた献立であり、芋のつるの煮物など、地域性も豊かである。すきやきやおでんなどもメニューにあがっている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴は午後2時から4時にしており、毎日入りたい人にも対応している。マンツーマンの同性介助である。ゆず湯や菖蒲湯などにも取り組んでいる。		
（3）その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	食事の準備、後片付け、洗濯物干し、洗濯物たたみ、掃除等が支援されている。畑の作業や草ひきを喜んでしている利用者がいる。体操、カラオケ、絵写し、なぞなぞ、テレビの時代劇鑑賞、歌などを楽しんでいる。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	日常的には散歩に毎日、少ない人でも週に3日は出かけている。ドライブは季節ごとに桜や紅葉を見に行ったり、買い物に行ったりしている。個別外出としては馴染みの美容室に行ったり、家族に墓参りに連れて行ってもらったりしている。和知で給食調理員をしていた利用者を和知の小学校に同行したいと考えている。		
（4）安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	玄関や併設のデイサービスの玄関等、いずれも施錠はされていない。食堂から大きなガラス戸を開けるとすぐ外に出られるが、施錠はされていない。利用者が京北町内を歩いていれば、地域住民からの通報などの協力がある。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	消火器、通報機、感知器、防火管理者等は設置され、消防計画を作成している。避難訓練は夜間想定も含めて、年2回実施されている。備蓄の準備、地域との防災協定書の策定が期待される。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の食事摂取量と水分摂取量の記録は残されている。毎日の献立について、法人内の管理栄養士に点検してもらい、カロリー値の記録が残されている。栄養バランスについては問題がない。		
２．その人らしい暮らしを支える生活環境づくり （1）居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム内は木の床でバリアフリーであり、そのなかで利用者はスリッパを使用せず、素足や靴下などで過ごしており、家庭的である。居間兼食堂はゆったりとして広く、ソファや椅子が置かれている。本棚や整理棚の上には大きなぬいぐるみや綿の花を生けた花瓶が置かれている。壁には大きな季節の貼り絵やカレンダーが貼ってある。すぐ外にはテーブルとベンチを置き、気候の良いときは日光浴やお茶ができる。坪庭があり、京都らしさを感じさせる。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間兼食堂の北側に居室が配置されているが、トイレや浴室、洗面所などにより一律に部屋が並ぶのではなく、視界をさえぎる工夫がされており、畳の部屋と木の床の部屋がある。居室内には利用者の使い慣れたたんす、鏡台、ホームコタツ、衣装ケース、テレビ等が持ち込まれている。自分や家族の写真、とくに孫の写真をたくさん飾っている人、位牌を飾り、花を供えている人、自作の絵を額に入れて飾っている人など、それぞれ個性的である。		